

源氏秘義抄

源氏最要抄

浮木

源氏抄

紫塵愚抄

源氏物語古註釈叢刊 第五卷

中野

中野幸一編

源氏秘義抄 源氏最要抄

浮木 源氏抄 紫塵愚抄

源氏物語古註釈叢刊 第五卷

武蔵野書院

編者略歴

出身 昭和七年五月 神奈川県生

現職 早稲田大学教授（文学博士）

編著書 物語文学論攷

うつほ物語の研究

うつほ物語資料

現住所 神奈川県逗子市逗子四ノ三ノ二九

昭和 57 年 7 月 20 日 初版発行

源氏物語古註釈叢刊 第五巻

源氏秘義抄
源氏最要抄
浮木抄
源氏抄
紫塵愚抄

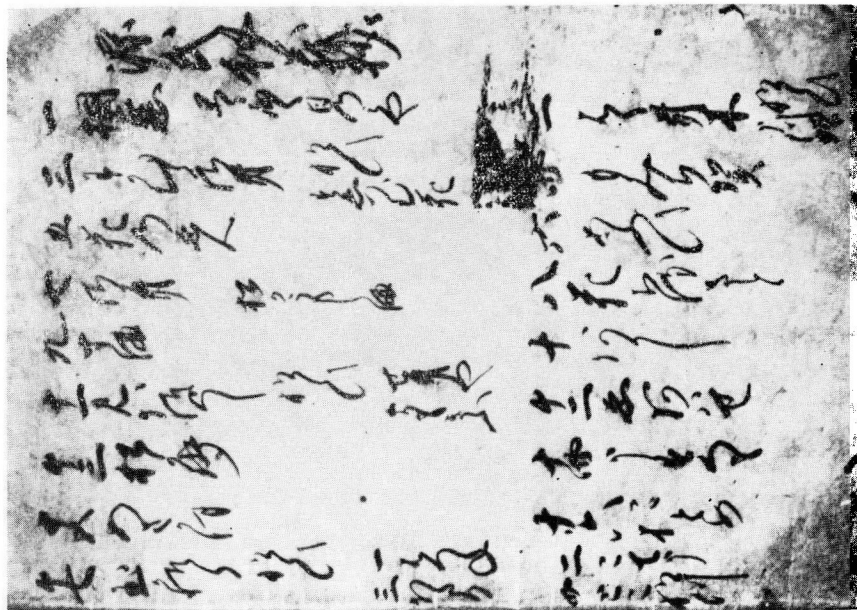
定価 10000 円

編者 中野幸一

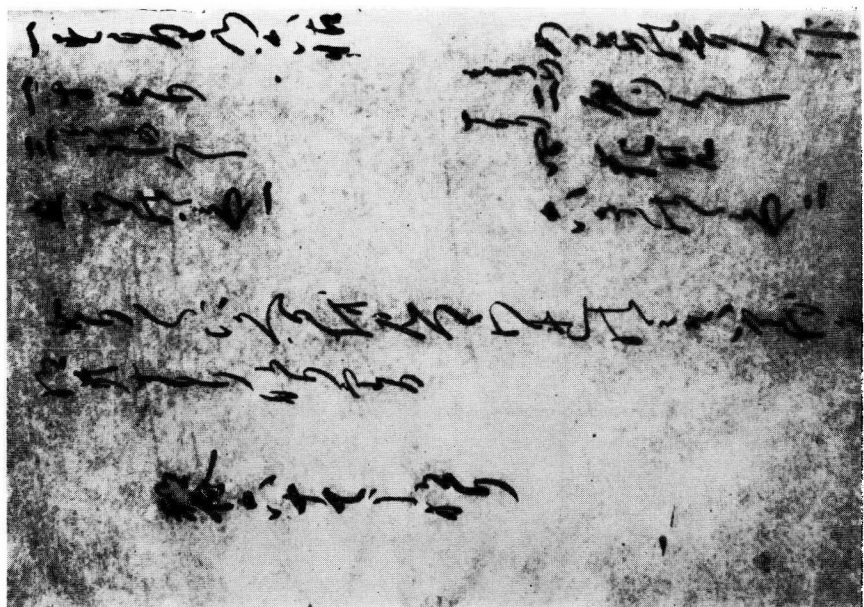
発行者 東京都千代田区神田錦町三ノ十一
前田武
印刷者 東京都文京区白山三ノ一ノ四
柿崎忠一郎

発行所 東京都千代田区神田錦町三ノ十一
合名会社 武蔵野書院

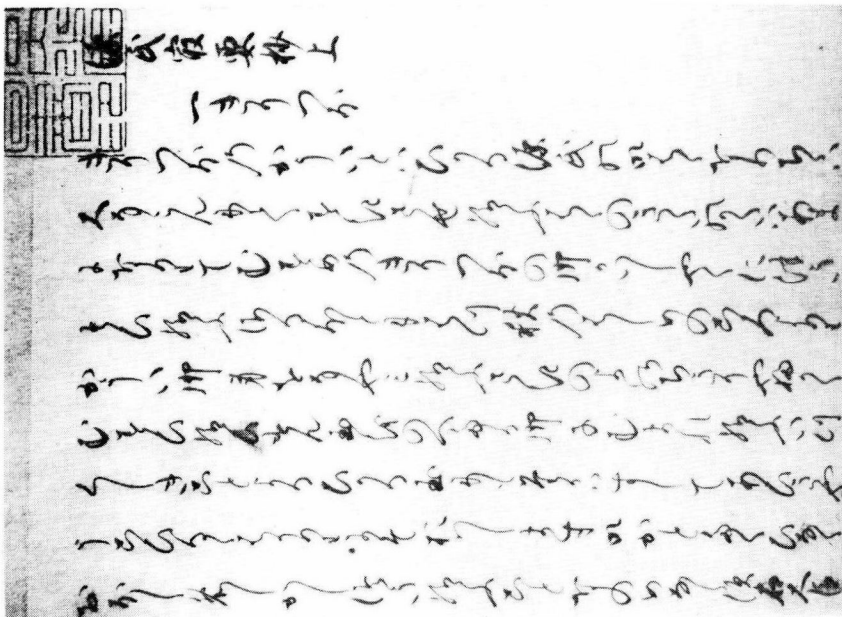
振替口座東京九一六七一四六番
電話東京（21）四八五九番（代）
郵便番号一〇一



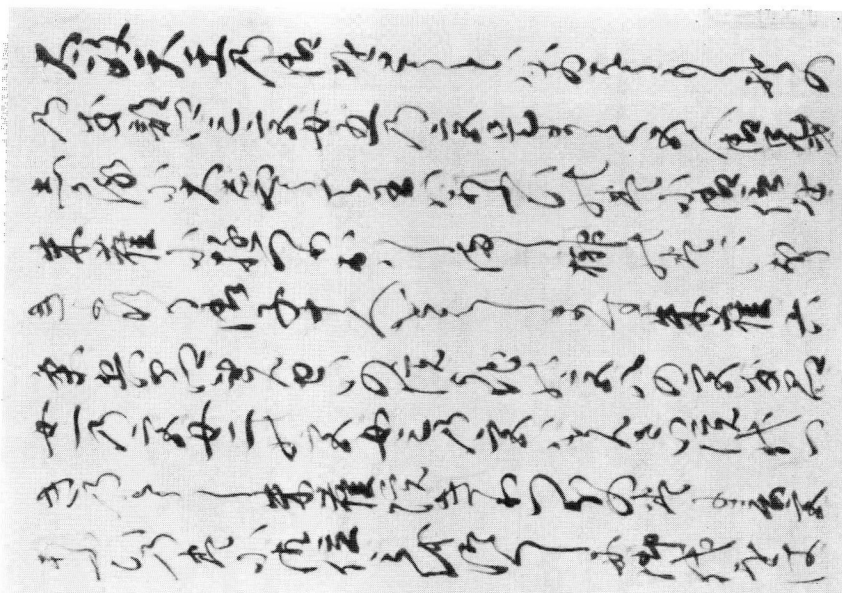
源氏秘義抄 卷頭(宮内庁書陵部蔵)



同右 卷末



源氏最要抄 卷頭(宮内庁書陵部藏)



源氏抄 卷頭(早稲田大学図書館蔵)

同右卷末

浮木 卷頭(宮内庁書陵部蔵)

有聲



Handwritten text in cursive script, likely a poem or prose passage, written on a light-colored background.

Handwritten text in cursive script, likely a poem or prose passage, written on a light-colored background.

同

凡 例

一 本書は『源氏物語古註釈叢刊』の第五巻として、『源氏秘義抄』『源氏最要抄』『浮木』『源氏抄』『紫塵愚抄』を翻刻収載した。このうち『源氏抄』を除く四部は、本書において初めて翻刻公刊されるものである。

一 底本および校合本には、それぞれ左記の諸本を用いた。

- (1) 『源氏秘義抄』は、宮内庁書陵部蔵の桂宮本（室町末期写 一冊）を翻刻した。
- (2) 『源氏最要抄』は、宮内庁書陵部蔵の桂宮本（江戸初期写 二冊）を翻刻した。
- (3) 『浮木』は、宮内庁書陵部蔵の桂宮本（江戸初期写 五冊）を翻刻した。以上三部とも、現在他に所伝を聞かない孤本である。

(4) 『源氏抄』は、早稲田大学図書館蔵本（江戸初期写 一冊）を翻刻した。

(5) 『紫塵愚抄』は、室町中期の写本（四冊 架蔵）を底本とし、校合には宮内庁書陵部蔵本（室町中期写 四冊）を用いた。

一 底本の翻刻に際しては、できるだけ原文のままを原則とし、底本の誤字・脱字・宛字・仮名遣い等もそのままにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して、次のような操作を行なった。

- (1) 底本の変体仮名はすべて通行のひらがなに統一した。
- (2) 底本の旧漢字は、当用の字体のあるものはこれに改めた。また略体・異体字については、通行の字体として用いられているものはそのままとし、他は「哥」「貞」などの数文字を除いて、通常の字体に改めた。
- (3) 読みやすくするために、文の切れ目には一字分あけた。

(4) 『浮木』の注記には、時に片仮名が混じっており、それらも原則としてそのままに翻字したが、「ハ」「ニ」「ミ」などについては、前後の用い方により適宜片仮名か平仮名かを判断した。

(5) 『源氏抄』『紫塵愚抄』の底本には、朱の合点や圈点が付されているが、それらは後人の所為と考えられるので示さなかった。

一 『紫塵愚抄』の校異は、おおむね次のような方法によった。

(1) 校異は原則として底本に対し異文と認められるものについて表わした。

(2) 漢字と仮名の区別、仮名遣いの相違、送り仮名の過不足等については、校合本が底本の誤りを訂したり、底本の読みの補助となりうる場合にこれを示した。

(3) 仮名遣いの相違のうち、「む」と「ん」、「う」と「ふ」の用い方については、両本間にかなりの相違があり、これらは写本の特性とも考えられるので、とくに校異に示した。

(4) 底本文との異なりは、底本の該当部分に傍線を付して、その右側に対応する異文を示した。ただし印刷の都合でこれらを本文の左側に移した場合もある。

(5) 底本の一部が校合本に存在しない場合は、その部分に傍線を付してその右側に「ナシ」とした。

(6) 底本の脱落や、底本にない傍注・書入等を校合本によって補った場合は、その部分を「」で示した。

一 本書収載の文献資料の翻刻・校合・調査・閲覧・撮影等に関しては、宮内庁書陵部・国文学研究資料館・早稲田大学図書館等のご理解あるご援助をいただいた。記して衷心より感謝の意を表する次第である。

目次

源氏秘義抄.....1

源氏最要抄.....29

上（桐壺）（権）
下（乙女）（夢浮橋）

浮木.....91

- 一（桐壺）（花宴）
- 二（葵）（松風）
- 三（薄雲）（真木柱）
- 四（梅枝）（竹川）
- 五（橘姫）（夢浮橋）

源氏抄.....327

紫塵愚抄.....343

解題.....475

源氏秘義抄

(内題)
源氏秘義抄
(外題ナシ)

一桐壺かゝやくひのみや
三わかむらさきならひ
すあつむ花
五花のゑん
七さかき松かうらしま
九すま
十一みほつくしならひ
せきや
よもさふ
十三松かせ
十五あさかほ
十七玉かつらならひ
一はつね
三はたる
二こてう
四とこなつ
七みゆき
十八むめかえ
廿わかな上下
二くわんなり
廿二よこふゑ
廿四御のりならひ
すゝむし
二はゝき木ならひ
うつ蟬
四もみち賀
六あふひ
八花ちるさと
十あかし
十二ゑあはせ
十四うす雲
十六おとめ
十九ふちのうらは
廿一かしはき
廿三ゆふきり
廿五まほろし

廿六くもかくれ

ならひこうはあ
たけかは

宇治十てう

一はしひめうはそく共

三あけまき

五やとり木ならひ
かはとり

七うき舟

九てならひ

そうして五十四

廿七にはふひやうふきやう
かはる中将

二しゐかもと

四さわらひ

六あつまや

八かけるふ

十夢のうきはしのりの師

一桐壺といふはしくけいしやなり きりつほのかういのこと
をいふによりてきりつほといふなり かゝやくひのみやとは
ふちつほのねうこのみかとの御おはえてりかゝやくほとなれ
はてる日のみやといふなり
二はゝき木といふはいよのすけかつまにけんしのかよひ給ひ
けるとき

数ならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらすきゆ
るはゝき木
とよみてけんしの

はゞきゝのころをしらてそのはらのみちにあやなくま
とひぬるかな

とのたまひたる御返事もしけるゆへにはゞきゝといふなり
ならひうつせみといふはこ君をしるへにてうつせみのもとへ
ゆきたるにきぬをもぬけにぬきをきてちやうのうしろへかく
れぬ けんしそのきぬをとりてかへりてこきみをつかひにて
うつ蟬の身をかへてける木のもとになを人からのなつか
しきかな

御返し

うつせみのはにをく露の木かくれてしのひ／＼にぬるゝ
そてかな

といふゆへにうつ蟬といふなり ならひゆふかほといふはけ
んしのたいにのめのとのわつらひけるとふらひにゆきてくる
まいるへきかとあくるほとおほちにたちたまひけるにはしと
みあげわたしたるいゑの前のたてしとみめきたるものにあを
きかつらの心地よけにはひかゝれるにしろき花のさきたるを
御らんしてをちかた人に物申すときちす^(ママ)みたまふをかのしろ
くさけるをなんゆふかほと申侍ときこゆ なは人めきてあや
しきかきねにさける花のちきりこそとのたまひたれば御すい

しんよりておらむとするにくれなぬのはかまなかやかにふみ
くゝみたるわらはのやりとよりさしいてゝえたもなさけなか
めりとこれにすへてまいらせよとてあふきをとらせければ花
をあふきにそへて御車にさしいるに人にもちならしたるあふ
きのつまに

こゝろあてにそれかとそ見るしらつゆのひかりそへたる
ゆふかほのはな
とある返しにけんし

のゆふかほ

このゆへにゆふかほのやとゝそこをはいふなり
三わかむらさきといふはむらさきのうへはふちつほにすみた
まへるうへにふちつほのゆかりとおもひてむかへとりたまひ
けるなり 源氏むかへたまひて

ねはみねとあはれとおおもふむさしのゝつゆわけわふる
草のゆかりを

むさし野といへはかこたれぬとかきたまへるを見たまひて
かこつへきゆへをしらねはおほつかないかなる草のゆか
りなるらん

とのたまひければ此ひめきみをむらさきのうへといふ也 い
またをさなき人なればわかむらさきといふなり 藤つほをは
おほむらさきにたとへたるなり ならひにすゑつむ花といふ
はひたちのみやのひめきみのはなのさきあかきをよそへてく
れなゐのすゑつむ花とたとふなり 源氏此はなのさきをおも
ひてのきちかきこうはいを見給ひて

くれなゐのはなそあやなくうとまるゝむめのにほひはな
つかしけれと

又源氏

なつかしき色ともなしになにゝこのすゑつむ花をそてに

ふれけん

このゆへなり

四紅葉の賀といふはこゐんの神無月わたりにきくの花もみち
さかりなるに源氏ととうの中將とせひかいはまひ給き かさ
しにきくもみちをかさしけり されはもみちのかといふなり
こゐんの御賀なり せひかいはまはせたまひてのゆふさりふ
ちつほへけんしまいらせたまへる

物おもふにたちまふへくもあらぬ身のそてうちふりしこ
ゝろしりきや

御返し

から人のそてふる事はとをけれどたちゐにつけてあはれ
とは見き

このゆへにいふなり

五花のゑんといふはしゆさくゐんのくらゐの御時なり その
よはおほろ月よのないしのかみのこうきてんのみつのくちに
てあひはしめしなり

藤つほ

おほかたに花のすかたを見ましかはつゆも心のをかれま

しやは

源氏

ふかきよのあはれをしるも入月のおほろけならぬちきり

とそ思ふ

おほろ月よ

うき身世にやかてきえなはたつねてもくさのはらをほと
はしとやおおもふ

六あふひといふはかものまつりをみし時あふひをかさしにせ
しゆへにあふひといふ也 せんはうのみやすん所とあふひの
上とくるまあらそひありけり 六てうのみやす所なり

七さかきといふはあふひのうへにせんはうのみやす所たゝり
てとりころしたてまつりてのちに源氏の大しやうみやす所を
うらみたてまつりてありしかはこゐんのくらゐをもてしゆさ
くゐんのくらゐにつかせたまひしとき十四にてさいくうの伊
勢へくたりたまふにみやす所つれていせへくたらむとし給時
のゝみやにて源氏おはしましてみやす所にむかひて

おとめこかあたりとおもへはさかきはのかをなつかしみ
とめてこそおれ

とよませたまひける 返し

神かきはしるしのすきもなきものをいかにまかへておれ
るさかきそ

此ゆへにさかきといふ也 まつかうらしまといふはこゐんか
くれさせたまひてふちつほの女御あまになりてさといりに
おはしましけるに源氏まいりたまひてければりやうあんにて
きちやうなともにひいろにてありければあはれにて

うきめかるあまのすみかを見るからにまつしはたるゝ松
かうらしま

このうたのゆへに松かうらしまといふなり

八花ちるさとゝいふは六てうのゐんのなつの御かたに木かけ

にすゝむへきときは木ともうへならへたるにたち花のあるを
見てこのみてゐたまひけるあひたたち花の花ちるさとゝいふ
なり

たち花のかをなつかしみほとゝきすはなちるさとをたつ
ねてそとふ

と源氏のよみたまへるによりて花ちるさとゝいふなり
九すまといふはけんしすまのうらへななされたまへるにより
ていふなり かみなりさはきあり

源氏すまよりおほる月よへ

こりすまのうらの見るめもゆかしきにしほやくあまやい
かゝおもはん

十あかしといふは源氏すまよりあかしへうらつたひしたまひ
しほとにあかしといふなり この時にてけんしみやこかへり
あるなり

なけきつゝあかしの浦のあさきりにたつやと人をおもひ
けるかな

十一みほつくしといふは源氏にゆきあひたまひたれともたい
めむもせぬあかしのうへよめり

かすならてなにはの事もかひなきになに身をつくし思ひ

よりけん

此哥のゆへにみほつくしといふ也

けんし

身をつくしこふるしるしにこゝまでもめぐりあひけるえ

にはふかしな

この御返しなり 此哥のつゐてに源氏よめる

つゆけさのむかしににたる旅衣たみのゝしまのなかまか
くれす

ならひせきやといふはいよのすけひたちのかみにてくたりけ
るにめのうつ蟬をくしてくたりけるに源氏いし山まうてして
かへり給けるにあふさかにてゆきあひ給へるに源氏よみてや
る

あふさかのせきやいかなるせきなれはしけきなけきの中
をわけけん

といふ哥の御返しに

なみたのみせきとめかたきしみつにて行あふみちははや

くたえにき

とよみけるゆへにせきやといふなり

よもきふといふは源氏あかしよりかへり給てすゑつむ花のや

とをわけ入たまふとて

たつねてもわれこそゆかめみちもなくふかきよもぎのも

とのこゝろを

とよめるによりよもきふとこのまきをなつくる也

十二ゑあはせといふはさきのさいくせんはうの御むすめを
六てうのあんの御子にしたてまつりたまひてれんせんぬんに
たてまつりてのちむめつほときこえしにちしのおとゝのねう
ここうきてんの女御にたかひにいとみてゑあはせをしたまひ
しなり むめつほはかた人はうすくものゐんこうきてんはみ
ぎりなり ひたりには伊勢物かたりみぎりにはしやう三位ひ
たりには(竹脱丸)とりのおきなみきりにはうつほのとしかけ 此ゆ
へにゑあはせといふなり

十三松風といふはあかしのうへみやこへのほりてあかしのに
うたうのものとたいの山ざとにゐたまへるにあかしのあまき
みむすめにつれてのほりたりけるかよめる

身をかへてひとりかへれるふるさとにむかしににたる松

かせそふく

とふるさとかへりてよみけるなり このゆへに此まきを委
かせといふなり